5．きらめく動物たちの命と海
【久保田信の白浜だより(その46)】

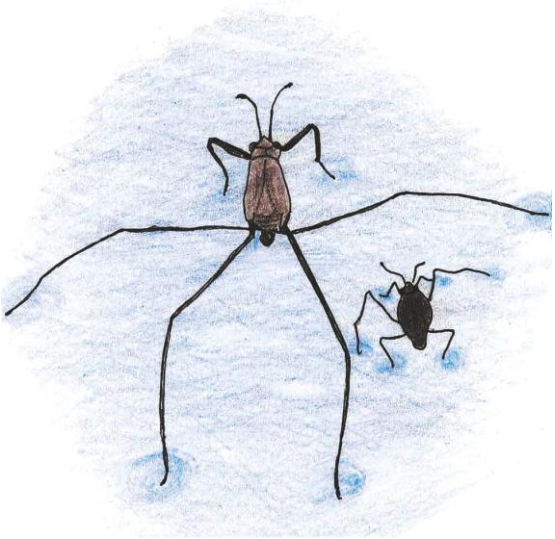
※前回掲載の「海面滑走の淡水性アメンボ ～空飛ぶ『バンパイア』～」に続きアメンボ（獲物の体液を吸う「バンパイア」）がテーマ。今回は「淡水性」ではなく「海洋性」の小さなアメンボの紹介です。

海の小さな『バンパイア』

海洋生物の多様性は門レベルでは高い。生命の海、母なる海とは、確かに言いえて妙である。現在生きている動物 144 万種ほどを最も細かく門に分けると、44 動物門となる。この分類方法は研究者によって異なるのは否めない。しかし、どう分けられようと、地球の動物門のほとんどは海洋に生息する。もちろん海洋にも陸上にも生息する動物門を含めての割合である。それでも、海洋だけにしか生息していない動物門にしぼっても、約半分の動物門がそうなのである。たとえば、おなじみのウニ類やヒトデ類、あるいは人間に近いとされるホヤ類は海洋にしかいない。これに対して、陸上にのみ生息する動物門はというと、わずか 3 門だけとなる。

海洋における動物門の多様性とは逆で、昆虫類が属する単肢動物門は海洋にはほとんど生息しない。世界一多種が記載され、100 万種に及ぶ虫たちであるというのに……。

海洋性のアメンボ



世界には 60 属 500 種余りものアメンボ類が記載されている。不思議なことに日本産は少なく、わずか 6 属 22 種ほどしか知られていない。勿論ほとんどが淡水性である。しかし、その中には沿岸や沖合に暮らすウミアメンボ類という変わり者がいる。ウミアメンボ類は体長はわずか 5 mm ほどの小さな体で、肉眼で発見しづらい。体形は陸上にいるアメンボと同じだ。ウミアメンボ類は海表面で動物の死がいをあさっている。しかし、生活史についてはほとんど分かっていない。

筆者も参加した研究航海で、南西諸島沖合の海表面でプランクトンネットを曳いた時、芥子粒のようなウミアメンボが採れたこともあった。しかし、あまりの小ささに、残念ながら、出来栄えの良い写真撮影に至っていない。毎日見回っている白浜町の瀬戸漁港や京都大学瀬戸臨海実験所でもめったに出会わない。

海洋にはケシウミアメンボというのが生息する。この種の体長は、1.5〜2.4mmとそれはそれは小さい。一見すると普通のアメンボに似ているが、科のレベルから異なっている。雄は小型で卵形、雌は雄よりひとまわり大きく、丸みを帯びた菱形をしている。体色は黒く無翅で、体表面にはビロード状の微毛が密生している。比較的波の穏やかな内湾で採集されることが多く、潮流の影響を受けにくいよどんだ場所を好むらしい。国内では本州・四国から南西諸島の黒潮流域や瀬戸内海に面する自然海岸の岩礁帯付近に広く分布している。しかし、護岸工事などによって生息環境の悪化が心配されており、山口県などではレッドデータブックの準絶滅危惧種に指定されている。ますます海から昆虫類は減っていくのかもしれない。